

報告

国際ボランティア活動への徳島大学学生の参加 ——北海道大学歯学研究科主管 JICA 草の根支援事業 (バングラディシュ) 支援学生チームへの参加——

青木理紗¹⁾ 森田康彦²⁾ Khurshiduz Zaman³⁾ Zunaid Ahmed⁴⁾ Md. Haider Ali Khan⁵⁾
伊藤博夫⁶⁾ 滝波修一⁷⁾

- 1) 徳島大学歯学部歯学科 2) 徳島大学病院・歯科・歯科放射線科
3) Division of Dentistry, Dinajpur Medical College (Bangladesh)
4) Department of Pharmaceutical Sciences, Sapporo Dental College (Bangladesh)
5) Department of Public Oral Health, Dhaka Dental College (Bangladesh)
6) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部予防歯学分野
7) 北海道大学大学院歯学研究科歯科放射線学講座

(キーワード: 国際ボランティア活動、歯磨き指導、バングラディシュ)

Participation in an International volunteer activity by a student of The University of Tokushima —Taking part as a supporting team member in a JICA grass-root project (Bangladesh) implemented by the Hokkaido University Graduate School of Dental Medicine —

Risa AOKI¹⁾ Yasuhiko MORITA²⁾ Khurshiduz Zaman³⁾ Zunaid Ahmed⁴⁾
Md. Haider Ali Khan⁵⁾ Hiro-o ITO⁶⁾ Syuichi TAKINAMI⁷⁾

- 1) Faculty of Dentistry, School of Dentistry, The University of Tokushima
2) Division of Oral Radiology, Department of Dentistry, Tokushima University Hospital
3) Division of Dentistry, Dinajpur Medical College (Bangladesh)
4) Department of Pharmaceutical Sciences, Sapporo Dental College (Bangladesh)
5) Department of Public Oral Health, Dhaka Dental College (Bangladesh)
6) Department of Preventive Dentistry, Institute of Health Bioscience, The University of Tokushima Graduate School
7) Department of Dental Radiology, Graduate School of Dental Medicine, Hokkaido University

Abstract : We reported the result of participation of a student belonging to the University of Tokushima in an international volunteer activity in Bangladesh on 2010 summer. This activity was entitled as a " Model Project for Improvement on Oral Health Care in Rural Area in Bangladesh", a grass-roots project supported by JICA. A female third-year student (Risa AOKI) of the faculty of dentistry took part in this activity as a supporting team member. This supporting team was organized by the students of Hokkaido University and was composed of Japanese university students from Hokkaido, Hokkaido Health Science, Nagasaki and Tokushima universities. Purpose of this activity was to provide an effective oral health care program that includes motivating and instructing the method of tooth brushing to approximately four thousands students of twelve primary schools in a typical rural area of Mohichail Union of Bangladesh. This program also included motivation and instruction of the primary school teachers, students of dental colleges and dentists in Bangladesh so that they could participate in this program and carry out similar type of program in future. It was a great experience for us to join the general university students who organized this international volunteer team. This project taught us how to implement a feasible and experienced plan in a low socio-economic condition which was a good example for an international volunteer activity.

(Key words: international volunteer activity, tooth brushing instruction (TBI), Bangladesh)

1. はじめに

国際保健ボランティア活動への学生の参加は漠然とした“憧れ”であったが既に可能となった。

一方、我が国の大学のカリキュラムへの組み入れや、公式な支援、後援を行うためには事故発生

時の責任やマスコミ対応、国立大学では公金支出の要件など、現地での活動以前に解決すべき問題が多い。このため、必ずしも学生の要望や社会の大学に対する期待に答えているとは言えない。

さらに実行段階においても、大学では留学生の

受け入れや学術協力の外では国際協力に関する知識や人材は十分とは言えない。

すなわち援助を求める後開発国からの留学生と援助を行う意思のある学生、教員がいて、援助できる技術や能力が揃っていても、GO（政府間援助）、NGO、企業活動と異なり、多くの大学には活動、教育として行うノウハウが蓄積されていない。

このような中で北海道大学歯学部では、学生主導でのユニークな国際学生交流とボランティア歯科保健活動が行われてきた。

特にバングラディッシュに対しては2008年冬季より北海道大学歯学研究科によるJICA草の根支援事業“バングラディッシュ国における健康増進のための予防歯科モデル事業”に発展している。

今回、徳島大学学生（筆頭著者）が他の3大学の学生とともに本事業の支援ボランティアとして参加した概要を経緯と共に報告する。

2. バングラディッシュへの歯科保健事業支援の経緯

北海道大学歯学部では同学大学院を卒業した後開発国留学生との交流が盛んで、歯学部学生サークル（Interactive Dental students' Alliance for Health Care 以下 IDAH と略称）が2002年より各地を訪問し学童への歯磨き指導等をしてきた。

バングラディッシュへは2002年、2005年（ユネスコ事業）の訪問を行い¹⁾、1) 元留学生が本国の大学や歯科界において指導的な地位について、2) 生活環境が徐々に向上し日本人学生の現地活動が少し容易になってきたこと、3) 同時にそれまで日本側から提供してきた講演や学術交流の意義・有効性に疑問と限界があることなどから、現地と共同で予防歯科事業をおこなう計画が浮上した。具体的には元留学生のダッカ大学教授 Mohiuddin Ahmed 氏が無料巡回診療を行っていたチッタゴン管区コミュラ県のモヒチャリ村において小学校での歯磨き指導事業を行うこととなった。

3. 本 JICA 草の根支援事業の概要

学生チームは北海道大学歯学研究科の主管する独立行政法人国際協力機構（JICA）による草の根

技術協力事業（支援型）“バングラディッシュ国における健康増進のための予防歯科モデル事業（Model Project for Improvement on Oral Health Care in Rural Area in Bangladesh）”を支援するために参加した。JICA 事業は政府間協定による開発援助事業（GO による ODA）の一端で、今回の事業は国際援助の既支出予算が少なく経験の浅い団体に対する支援であり、事業は2008年冬から2011年までの3年計画で、教員の参加は年2回（夏季、冬季学生休暇中）、学生チームの支援は年1回の夏季休暇中のみである。

本 JICA 事業の直接の対象（受益者）はバングラディッシュの農村の小学校学童である。小学校学童を介して、さらに親を介して家族や近隣の村人へ口腔衛生概念が広がることを期待したものである。また学校単位の保健衛生活動の自立、持続可能化を目指し、現地の小学校教員に対して口腔保健の啓蒙と学童への指導法の教育を行なった。同時に現地の歯科医師、歯科学学生に歯磨き指導活動を体験してもらい、現地側のみで実施できるように“技術移転”を行った。中でも今後指導的地位を占める現地の若手歯学部教員に、実際のプロジェクト運営に参加してもらうことで、事業は徐々に自立へ向かっている。

JICA の事業では、未だ専門家ではない歯学生は制度上は事業本体の構成員になることはできず、あくまでボランティアである。そのため徳島大学学生の渡航経費は自己負担であったが、北海道大学学生は学内資金から国際交流事業としての援助を受け、外部資金としては富徳会の援助を受けた。

4. これまでの経過

これまでの経過を簡単に表1にまとめた。

学生チーム IDAH は2008年夏に現地モヒチャリ村を訪問し、無料巡回診療に参加するとともに、農村より学校の設備や参加者の宿泊などの条件がやや良い地方都市クルナ市にて歯磨き指導を試行し準備を整えた。

2009年7月27日～8月23日の1回目の歯磨き指導事業は事業の導入と位置付けられ、日本での準備段階（紙芝居作成等）から現地セミナー、歯

磨き指導の準備、実行（生徒整列、機材準備）まで IDAH が全般にわたり支援した²⁾。

表1 経過

～2008年	原案作成の現地打ち合わせ JICA ダッカ事務所と協議開始
2008年夏	予備調査(学生チーム IDAH) 地方都市の小中学校で試行
2008年11月	現地政府と JICA、 北海道大学の覚書調印
2009年2月	北海道大学にて最終受託調印 ダッカ在住の歯科医、大学教授 員への事前打ち合わせや指導
2009年7月	現地活動 7/27-8/23 ²⁾
2009年12月	現地活動 12/22-翌年 1/10

5. 今回の支援事業の概要

今回 2010 年の事業は前回の“導入期”から“展開期”と位置付けられ、現地の自立的な運営の確立が目的であった。このためダッカ市内の歯科大学全 12 大学のうち試験期間中のため参加できなかった 1 大学を除く 11 大学の最終学年の学生に参加を呼び掛け、45 名に実際の活動に参加してもらった。(その次の 2010 年～2011 年にかけての冬季事業は全歯科大学から参加があった。)

主な事業は7月27日から8月20日にかけてモヒチャリ村(ユニオン)を中心に行われた。対象の小中学校(図1)は12校で、そのうち3校はイスラム学校である。



図1 小中学校での事業終了後の記念撮影

(低学年グループ)対象生徒数は4000人弱で実際は3000人強に歯磨き指導と口腔検診(図2、後に

掲載)を行った。歯磨き指導を全12校、口腔検診はイスラム系3校を除く9校で行った。主な行事を以下表2にまとめた。参加者は末尾の表3-1から3-4のとおりである。

表2 主な行事

7/27	モヒチャリ村セミナー 小学校教師対象
7/30	ダッカワークショップ 現地歯科医対象
8/2～5	第1週目(TBI7校、検診2校)
8/6	ダッカ講習会 現地歯科大生対象
8/7～10	第2週目(TBI5校、検診4校)
8/10	両国学生合同交流事業
8/11～17	第3週(検診3校)
8/11	学生交流会 両国の学生対象
8/16, 17	モヒチャリ村セミナー 学校運営委員会及び 母子保健指導員対象
8/18	サッポロ歯科大学訪問 JICAへ報告
8/20	帰国

まず実施に先だつて、モヒチャリ村の35名の小学校の教師に対してセミナーを行い、口腔保健教育と今回事業のスケジュール説明と確認が行われた。モヒチャリ村での準備と並行して、現地の歯科医と学生への説明がダッカにて行われた。

モヒチャリ村の小中学校での実際の歯磨き指導、口腔検診活動は8月2日より開始した。1日あたり1ないし2校とした。

8月6日現地歯科学生への Khurshidu Zaman による事前の説明講習会の後、8月10日に現地歯科大学生も参加して最も学童数の多いモヒチャリ小学校(700人強)で歯磨き指導、口腔検診が行われた(図3、4、5、7、後に掲載)。この様子はコミュニティ地方で当日、8月11日にはバングラディッシュ全国にATNバングラのTVニュースとして映像とともに終日放送された。

8月11日にダッカにて学生交流会が行われた。

日本から参加した4大学（北海道大学、北海道医療大学、徳島大学、長崎大学）の学生による英語による大学紹介プレゼンテーションが行われた。8月12日以降はラマダン（断食月）となり、日中は口腔内に水を入れることが許されないため第3週は口腔検診と村の講堂でのセミナーを主体とした。この後コミュラから撤収し8月18日に現地の本事業の主なパートナーの1つであるサッポロ歯科大学（バングラディッシュからの北海道大学大学院留学生が設立したダッカ大学群の私立歯科大学）を訪問しJICAダッカ事務所へ報告を行った。機材の片付けや検診表の整理を行った後、8月20日（8月19日深夜発）に帰国の途についた。

6. 今回の徳島大学学生の参加内容と効果

徳島大学からの学生参加は筆頭著者1名で現地村での第2週目の活動からの13日間の参加となった。

日程の概要を表4に示す。

表4 日程の概要

8/8	夕方 ダッカ着
8/9	コミュラへ移動 歯磨き指導
8/10	歯磨き指導 (図3、4、5、7) 終了後ダッカに戻る
8/11	学生交流会で徳島大学の紹介
8/13	コミュラへ移動
8/14	口腔検診(図2)
8/16, 17	モヒチャリ村セミナー(図6) 終了後ダッカに戻る
8/18	サッポロ歯科大学を訪問 JICAダッカ事務所での報告会
8/20	帰国

学生の第1陣は7月30日から順次ダッカに到着した。今回の学生参加は北海道大学、北海道医療大学、徳島大学、長崎大学より7チームに別れて到着し、参加期間（最長15日間）も帰国日も参加内容もバラバラである。これは、震災などで用いられるボランティアセンター方式と類似している。

首都ダッカから小学校までは最悪では片道6時間を超えるため、学生チームは活動期間中はモヒ

チャリ村近くに合宿した。1週間の活動後にダッカにもどり、イスラム休日の金曜日はダッカで行事参加や適宜休養にあてた。

支援の内容は、現地スタッフによる歯磨き指導や口腔検診の支援が主であった。予め口腔検診表を各学校に配布し、教員に名前の記載とアンケートを依頼した上で当日、口腔検診（図2）を行った。



図2 現地歯科医と徳島大学生による口腔検診

この後、48人程度を1クラスとし、紙芝居（北海道大学学生が留学生と共に日本で作成した）と大型の歯列模型、歯ブラシを使い、歯磨き指導を行った（図3）。



図3 現地歯科大学学生による口腔保健の紙芝居
左端は現地大学教員、右端は支援の徳島大学生

指導を受けた学童には実際に歯磨きをしてもらい（図4）、クラスの代表の1名にプラークの染め出しのデモンストレーションを行った。



図4 小学校での歯磨き指導
最後方は小学校教員

学生チームは事前の機材の準備、検診表への記入、歯磨き指導前の歯ブラシ、歯磨きペーストの配布、歯磨き指導中は児童の面前での模型によるデモンストレーション、洗口の準備を行った。一見容易そうに見えるが、現地では各段階での児童の誘導や洗口のための井戸水汲み、コップの準備も大変な作業である(図5)。また、配布物(歯ブラシ、歯磨きペースト)を求めて部外者が侵入しようとするので、管理も重要である。現地価格でも極めて安価であるからといって安易に黙認すると、今後の他の各種事業(予防接種等)に悪影響を及ぼすので、管理の厳重化と配布対象の範囲の認識を共有する必要がある。物をもらいに入ってくる子供の排除もボランティアの重要な役割であるというのはかなり複雑で、辛い思いであった。



図5 北海道大学生による歯磨き後の
うがいの準備

8月16日には学校運営委員会28名と母子保健指導員12名に対して、8月17日には学校教員と

学校運営委員35名に対してKhurshidu Zamanがリーダーとなってセミナーを行った。この準備と、大型模型を使ったデモによる“歯磨き指導法”の指導の(図6)も学生の重要な役割である。



図6 モヒチャリ村セミナーでの徳島大学生による
小学校教員への歯磨き指導法の教育

全く歯磨き指導の経験が現地になかった事業初年度に比べ、実際の歯磨き指導や口腔検診の手法の理解は進んでいた。一方で、児童の誘導(通称サザエさん方式と呼んだ、手を挙げて子供の整列と誘導する方法(図7)や、事業計画の必要性など目に見えない部分については、日本側学生の支援なくできる段階には今回の事業開始時点では達していなかった。また、徹底した階級社会であるため、日本留学経験者を除けば、現地参加者で高学歴で上位(上流階級という意味ではない)にある人間には自らが準備等を行うことが全く意識がない。この点で大学のユニフォームを着た日本側学生が奔走することを見ること自体が現地歯科学生には重要であった。



図7 北海道大学生による“サザエさん方式”
の学童整列と誘導

半年後の冬季事業ではほぼ全日程で現地歯学生の参加があったが、この効果は参加した現地歯学生の、準備への自発的協力という結果として見られた。また、学童の口腔状態は予想以上に改善しており、事業に参加した歯科医、現地歯学部教員はもちろん、学童や父兄、小学校教員、2回の参加で変化を感じた歯学生の意識も高くなっている。

7. 講義、授業、報告会等を通して

近年我が国の大学には、国際化あるいは開かれた大学であることが求められている。一方で我が国の多くの集団や個人が、多様な側面で既に国際化を実感している。このため大学においては単なる言葉の飾り、あるいは宴会交流的発想を打破して、実際の活動を行うことが求められている。また後開発国の真の実情に対する無理解から発生する留学生受け入れに伴う様々な問題が顕在化している。

実際の活動や様々な対応や問題の解決には、簡単な解決策は無く、地道な対応と実際に後開発国での活動を行う要員の育成しかありえないと考えられる。このための第一歩は、講義授業を通して、実像にできるだけ近い内容を学生に伝達することであろう。

本学では3年前から予防歯科学のカリキュラムの中の国際歯科保健の項目として本プロジェクトのプロジェクトマネージャ（末尾著者）が本事業内容も含めた特別講義を行っている。同時に予防歯科分野主催でバングラディッシュ留学生も含めた学内講演会を開催している。今回の参加者はこのような講義を受ける前の学年であるが、このような事業の内容が講義等を通して学内で共有されたことにより、参加につながっている。

さらに今回の事業については筆頭著者による帰国報告会をヘルスバイオサイエンス研究部（林良夫元部長）主催で開催された。JICA 四国によるJICA 事業と、第二著者（本事業上では現地調整員）による本事業の経緯の説明も行われた。この報告会には歯学部の日本人学生、教員の参加のほか本学の歯学部以外のバングラディッシュ人留学生も参加している。

8. 本学学生参加の本学学生への意義

ボランティア活動や国際協力への参加について、総論としてはかつての後開発国への偏見による否定的な見解はもはや少なくなっている。一方このような活動は特殊で限られた能力や環境にあるものが行うという、“偶像化”は依然として存在する。

今回の参加と帰国報告会等を経て、多くの学生から、“本当に参加できるとは思わなかった。”、“本当に参加できるなら行けば良かった。”、“学生が行って邪魔にならない／貢献できるとは思わなかった”などの意見や感想を、学年を超え上級生や教員からもいただいた。

職業的海外活動家つまり JICA 長期専従スタッフ（海外協力隊ではない）や外交官、あるいは NGO 関係者とは異なる立場で、学生あるいは市民として参加することにも重要な意義があり、さらに、実際に活動をしてきた実績を教員のみならず学生にも示した意義は大きいと思われる。

さらに、現在多くのメディアによる情報が錯綜しているが、取材者の視点で切り取られた側面ではない。自らが行いたい事案についてはメディアによる受動的な情報では限界がある。特に多くの報道が、短期の取材によるややもすると誇張されたものであり、実際に活動したものと身近に交流できる意味は大きいと思われる。現在の事業の立案者もかつて現地訪問による後開発国への先入観、思い込みの打破を経験している。

なお、このような活動はそれなりのリスクを伴うため、各大学で現地状況の把握と、参加学生の参加意思と自覚について厳重に確認を行っている。

9. まとめ

2010年7月26日より8月20日にかけてバングラディッシュ人民共和国チッタゴン管区コミュラ県モヒチャリ村（ユニオン）でおこなわれた JICA 草の根技術協力事業（支援型）“バングラディッシュ国における健康増進のための予防歯科モデル事業”の支援学生ボランティアに本学歯学部学生が参加したので概要を報告した。

謝辞

在バングラディッシュ日本大使館ならびに富徳会の支援に感謝する。

表 3-1 参加学生名簿 (日程順)

鳥居	ちさほ	(北海道大学)
長南	奈欧	(北海道医療大学)
半谷	純一	(北海道大学)
中山	由香乃	(北海道大学)
福田	慎之介	(北海道大学)
河田	祐介	(長崎大学)
天野	利重	(北海道医療大学)
石丸	美穂	(北海道大学)
志摩	朋香	(北海道大学)
下島	千明	(北海道大学)
篠原	響子	(北海道大学)
上柳	安友子	(北海道大学)
横井	有紗	(北海道大学)
山本	茉実	(北海道大学)
酒井	安佳里	(北海道大学)
桐越	晶子	(北海道大学)
青木	理紗	(徳島大学)
正満	健斗	(北海道大学)
柴	雅樹	(北海道大学)
山本	芳輝	(北海道大学)
実藤	潤	(北海道大学)

表 3-2 現地参加者名簿とチーム構成

<バングラディッシュ代表>	
Mohiuddin Ahmed	(ダッカ大学)
<歯磨き指導班>	
Khurshidu Zaman	(ジョナスプール大学)
Md. Haider Ali Khan	(ダッカ大学)
Mohammad Naser	(陸軍)
Md. Arifur Rahman,	(以下ダッカ大学チーム)
Saieda Farzana,	
Jeyasmin Akter,	
Maruf Hasan Zaman,	
Arup Kumar Saha,	
Tania Jahan,	
Tanvir Ahmed Viswas,	
Md. Taib Bin Badsha	

<口腔検診班>

Md. Abadul Hannan (サッポロ歯科大学)
 Zunaid Ahmed (以下サッポロ歯科大学チーム)
 Md. Mahfuzul Gani,
 Ashek Elahi Noor,
 Mohammad Musa,
 Sujan Kanti Nath,
 Rokhshana Afroz Afrin,
 Md. Mahfuz Hossain,
 Sudeshna Priyadarshini,
 Das Gupta,
 Ashif Iqbal,
 Partha PratimDhar,
 Md. Shamim Al-Mahmud,
 Umma Habiba,
 Arefin Ashrtaf

<現地自治体>

Md. Shamsul Haque モヒチャリ村議長

<総務(資材手配、準備と輸送)>

Mahfujul Haq Khan (WHO拠点BIRDEN病院)

表 3-3 参加日本側

滝波修一(北海道大学) プロジェクトマネージャ
 森田康彦(徳島大学) 現地調整員TBI責任者
 本多丘人(北海道大学) 検診責任者
 中沢誠多朗(北海道大学) IDAH OB

表 3-4 資料作成並びに翻訳参加者

Md. Towfik, (全て北海道大学)
 Alam Chowdhury,
 Nusrat Fatema,
 Shamsul Haque

参考文献

- 1) 北海道大学歯学部冒険歯科 & Supporters: 北大冒険歯科の旅, UNESCOアジア文化センター BANGLADESH Study Tour 2005, 歯界展望, 108(6), 1251-1256, 2006
- 2) 冒険歯科&サポーターズ: 歯磨きを教えよう! —草の根支援事業プロジェクトと北大冒険歯科ボランティア, 歯界展望, 116(2), 372-375, 2010